

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第164号（2020年1月）



白井啓治

（三）本当の姿をしっかりと見定める一年に

『絵に描いた餅の旨さよ初日の出』

このところずーっとそう思っているのだが、どうも実体のないものに右往左往させられているように思う。それでこんな皮肉めいた一行の文を呟いてしまったのである。

年の暮れの二十八日である。我が百姓の師である松山有里さんと、餅つきをやるうということになり、近所の農家からもう半分腐りかかっている大きな臼を借りてきて、六世帯が集まって餅つき大会を行った。ところが実際の餅つきを体験した事があるのは私と、女優小林幸枝さんの父上だけなのである。

杵をバランスよく突くのには結構なコツが必要となる。力任せに突き下ろしてもペツタン、ペツタンと良い音はしないし、のびる餅にはならないのである。

美味しい餅をつくためには、蒸しあげた熱々のもち米が冷めないうちに一気に突きあげなければいけない。ところが突きあげていく餅をかえす手が熱

いのである。

最初に私と小林さんの父上とで見本を示したのであったが、未体験の人達にはそんなに易々と餅になつてくれないのである。当日は、厳しい筑波おろしが吹いたものだから、蒸したもち米が直に冷めてしまい、何白かは半突き状態の餅が出来上がってしまった。自分で突いた餅だから半殺しのような餅でも文句は言えない。突いた翌日あたりには、楽しかった思い出が手に残っているから、美味しく食べられたであろうが、肝心のお正月のお雑煮では、恐らくスーパードで買ってきた、切り餅の方が美味しく思えたに違いない。



（絵：兼平ちえこ）

スーパードに売っている切り餅は、所詮は絵に描いた餅に等しいと思っ

は、餅らしい餅で旨かったに違いないと思う。

しかし、見るだけのものを本物と思ってしまったら、実態のないものなのに実態があると錯覚を起こしてしまっていることが、最近はずいぶん多いため息がこぼれてくる。年の新らたまり最初の呟きが絵に描いた餅になろうとは些か寂しく思うが、年頭の厄払いと考えれば、絵に描いた餅は旨かった、でも良いだろう。（2009年1月15日）
（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを抜粋して載せています。）



《ふるさとの風に呟いて…》

・初春の雪空に何を思ふか 雀二羽きたる

昨年末に懐かしい文を目にした。

『自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためなのだ。批判の無いところに未来はない。無批判に日本の良さなどというのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ』

羽仁五郎の文である。

60年安保騒動後、文学者の戦争責任等と合わせて多くの本が出版され、私も随分と読み漁り、影響も

うけたり反発を持ったりしたことを今では懐かしく思い出す。

フェイスブックの仲間がシェアした文にこれを見つけた時に、青春の頃の懐かしさに合わせて、これは今こそ我々がもう一度声を大にして言い直すことが必要なのではないかとの思いに駆られた。

フェイスブックにもう一つ文が紹介されていた。写真家福島菊次郎氏の言葉なのだろうか、「勝てなくとも抵抗して未来のために一粒の種でもいいから蒔こうとするのか、逃げて再び同じ過ちを繰り返すのか」である。

小生、一輪の花しか咲かなくてもいいから、美しい花を咲かせたいとは常々思い願ひ、その努力を惜しまないようにしている。舞台に一輪、綺麗な花を咲かせてみたいと、絶筆したはずの筆をとり直し、常世の国の恋物語百に挑戦を始めたのであるが、百には未だまだ先が長そうである。しかし、途中で折れたとしても種さえ蒔いておけば誰かが後に続くだろうと思っている。

年の明けて元日。

何となく雪のちらつきそうな天気。お猫様を抱いて庭に出て思った。

『老いた頭で年の初めに何を願う 梅の蕾はかたく』

この季節の梅の蕾同様に小生の頭も年々柔軟性を失い硬くなっていく。困ったことに喜怒哀楽の感性に中間の層が狭くなり、白か黒か、快か不快かの表裏になつてきたように思う。白と黒とグレーの正三角形であつた筈の思考感覚がグレーの辺の長さがうんと縮まってきて鋭利な二等辺三角形になつてきた。

《 訃 報 》

本ふるさと風の会の会員の菅原茂美氏は病気のため昨年12月28日に逝去されました。ここに慎んで哀悼意を捧げます。以下は氏が1年ほど前に書かれたものですが、未掲載のためここに載せさせていただきます。

趣味こそ命

菅原茂美

以前随筆でのべた、自己叱咤の随筆「人食いライオン」。ちよいと怠けると人食いライオンに追い付かれ、喰われてしまう。私の心の中に棲んでいる人食いライオンは、これくらい大目に見てほしいと願つても、決して妥協や手加減はしてくれない。それはきびしい「連れ添ひ」で、60年来の悪友ともいえる。

ま、そんならそれで調子を合わせ、自分流の人生を送つてやろうと心に決めた。「獣医の仕事」、これは命を懸けた俺本来のものだから、存分にやったのは当然。しかし趣味の種目は、5件あるが、至らないものが多すぎる。やや満足のいったものもあれば、理想と全くかけ離れた、初等科で終えたものもある。まだ人生終わったわけではないが、八十路を過ぎては、今更発展の余地はなかるう。伸びしろは使い果たしたという所。

趣味の第一はまずこの「物書き」。一日で最も多くの時間を費やしている。筆はさっぱり滑らかにならない。ごつごつした岩場の山道みたい。打田先生のような滑らかさは私には無理なのかもしれない。尻切れトンボの未熟さが怖い。いつも拳骨を振り上げ、その落としどころに窮屈至極。

同じく大好きな「日曜大工」も、初等科止まり。

四角い箱物等を造つた時に、縦木（たてぎ）の枠と横木の交差点を、45度で合わせたい時、四隅のどこかに隙間ができて、キチンと45度接合はできない。悲しいかな経師屋の45度は無理と、諦めた。尤も素人がテーブルや扉などを造ろうとするのは無理な話ではあるけれど…。所詮ガーデニングテーブルや、同椅子止まりで妥協する他ないようだ。

次は「囲碁」である。石岡の公民館活動や、水戸の同好会では6段で打っているが、これは全くのご都合主義。現実の私の実力は、4・5段ぐらい。囲碁ソフトで4段にはほとんど勝てるが、5段には勝率3割弱。但し大会などで、5段で打つと私の勝率が良いため、仲間たちに勝利をもたらさない。優勝を平等にするため、即ち、多くの人に平等に優勝をもたらすために、ハンデとして私は6段に無理やり定着された。囲碁連盟のテストではないのだから、それでもよいかとしているが、未熟を容認する気にはならない。ところが最近、AI（人工頭脳）を駆使した新しい囲碁ソフトができ、購入し、試してみたら、5段で、20回ぐらい戦つて1度も勝てない。どう見ても私は5段には達していない。

やや満足しているのは「盆栽」。かれこれ47年間もやっているのだから、いい加減、幹は太ってきた。

割り箸みたいだったアケビ・皐月の一部はビール瓶並みに太った。立ち上がりが高いため、かなり貫禄がある。一時200鉢もあつたのに妻と物干し場所の関係でこちらが譲ることにし、今は何と僅か5鉢のみ。盆栽ではないが庭木の手入れにも情熱を注いだ。定年退職後月1。5年間で60回、プロの庭師に通い弟子になった。庭師の仕事も芸術的で、実に楽しい。私の盆栽は私から見れば国宝並みだが、倅は全く興味ないというし、俺が死んだあと、これら

国宝はどうなることや。ただの邪魔物かも……。そう考えると涙が出てくる。定年退職したら、時間とお金はあるはずだから、いくらでも没頭できると思っていたが、なんと今ではその情熱もいずこか兵士吹っ飛んで行ってしまった。

5番目の趣味は「家庭菜園」。こんな楽しいものはない。5畝の畝を15本。今年で6年目。まだまだ未熟。家で造った野菜は、確かに美味しい。近所にもおすそ分けしているが、実に美味しいと評判。要するに新鮮だからであろう。もぎたてだから美味しいのであろう。こちらにも有頂天になり、畑に夢中である。ジャガイモや玉ねぎなど保存のきくものは買った方が安い、どうしても汗の結晶をこの手で造りたい。

ところが今年は、悪性リンパ腫の抗がん剤投与のため、白血球が通常の半分以下。カビや、ばい菌に感染しやすく、直ぐ「敗血症」にかかる危険性があるため、土地いじりは、ドクターストップ。涙を流しながら、畑は休み。休耕の悔しさ。速く病気を治して、元気で畑に戻りたい。食糧自給率向上の為に。生まれは農家。やはり然るべき所に落ち着くものらしい。



地域に眠る埋もれた歴史(57) 木村 進

【石岡市内の社寺紹介】
あけましておめでとうございませう。今年も風の会で頑張つて行きますのでよろしくお願いいたします。

・華園寺と常光院

石岡駅前通り（八間通り＝御幸通り）を進み、国道355（旧水戸街道）に突き当たると、一つ手前の道（一方通行）を左折すると、ここが金丸寿通りである。通りの正面には（富田の）北向観音堂が見える。この通り沿いあたりは昭和4年の大火でほとんど焼けてしまった地域である。この金丸寿通り沿いの左側に「華園寺」と「常光院」が並んで建っている。寺の建物は正面からは引込んでいてよく見えない。



華園寺は弘安4年（1281）遊行2代真教上人が、常陸国巡行の折に建立したと伝えられるが、資料などはほとんど残されていない。元は天台宗であったが、現在は時宗とな

っている。本尊は阿弥陀如来像で、現在の本院は、文禄年間に時宗を尊崇した佐竹氏の建立と云われている。また天狗党の志士の宿としても提供された。特に過激派ともいわれた田中愿蔵の常宿であり、真鍋・中貫の焼打ちの際もここから出発したといわれる。

また、本堂左側の「えび子安地藏尊」は子安信仰の地藏で、安産の御利益があるといわれている。

常光院は華園寺を過ぎた少し先にある。常光院は、天台宗来迎山常光院極楽寺という。

昭和4年の大火では御本尊仏・過去帳などはどうにか難を逃れたが、本殿等は焼けてしまい、現在の本院は昭和38年に信徒の手で再建されたという。寺の入口には延命地藏尊が建っている。寺の入口は狭い路地となっており、石岡にはこのようなつくりが多い。



墓地には農具万能（まんのう）の発明者鈴木万能（鈴木平左衛門）の墓がある。農具万能（鋤くわ）は大変便利な鋤で備中鋤を改良し、「耕起・破碎・均平」すべてに使える2本

く5本歯の鋏である。特許でもなく、誰でもがつくることができたため、かつて町の鍛冶屋たちはこぞって万能を製作したという。今でも多くの人々に「まんのうくわ」として使われているという。

また、石岡の一里塚の先を少し行った左手に奥に「万能塚」と書かれた看板がある。こんもりとした塚と大きめの石が置かれている。鈴木万能（鈴木平左衛門）の自宅も香丸町の方にあったといい、この「万能塚」には、旧書に「万能塚は、今の万能の先祖にて、大和高峰山に信心して、それより万能と云う法号を得たり。この人の葬りたる故に、万能塚なりと云う。本姓は鈴木氏なり」と書かれているという。



このため万能の先祖が葬られたところと解釈できるかもしれない。またまわりから、鉄屑などがでてきているので、ここで万能を制作していたのではないかと考えられています。

・宇迦魂稻荷神社

宇迦魂稻荷神社（うかのみたまじんじや）は金丸寿通りの華園寺、常光院を少し、富田北向観音堂の方に進んだ右側にある。京都の伏見稻荷神社と同じ農耕の神、宇迦魂命を祭る。笠間稻荷神社なども商工業の神とされている。最初は農耕の神であったが、次第に商業の神ともなったものと推察される。鳥居をくぐったところに「二十三夜尊」の石碑が建っている。ここも日天宮などと同じように民家の間に挟まれるように神社が建っている。石岡の町はこのような小さな神社が数多く残されているので、街なかを歩いていくと思わぬところで発見されるのもまた楽しみである。



創建年代は不詳である。神体木像は、たび重なる火難をまぬがれているという。また境内には、大六天宮（山倉大神）の社と大山阿夫利神社が合祀されている。

毎年、町内では初午祭を行っているが、初午は春の初めに山から降りて来る田の神を迎える信仰が、農耕神的性格を有していた稻荷信仰と結びついたものだといわれている。

我が労音史（10）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1984年の社会情勢と音楽状況

国連が、エチオピアで50万人を超す餓死者が出たと発表し、アフリカの飢餓問題が深刻化した。インドでアメリカの殺虫剤工場の事故で2800人を超す住民が毒ガスで死亡。ガンジー首相（インド）がシク教徒により暗殺される。中英両国が、97年に香港返還で合意で調印。ソ連と東欧諸国がアメリカのロスアンジェルオリンピックのボイコットを声明。この年衛星放送が始まる。電電公社が民営化される。学術会議で遺伝子組み換えの研究を承認。三井・三池有明炭鉱の坑内火災で83名が犠牲になる。江崎グリコ・森永菓子事件が迷宮入りとなる。財田川事件の谷口被告に無罪判決（34年ぶりに釈放）、松山事件の斎藤被告に無罪判決（29年ぶりに釈放）死刑囚の再審無罪は3件目となり、冤罪が問題となった。冒険家の植村直巳が世界初の冬季単独登頂後行方不明となる。漫画雑誌「少年ジャンプ」（集英社）が600万部を超える。新札1万円（福沢諭吉）5千円（新渡戸稲造）千円（夏目漱石）が発行された。南アの黒人主教ツツ氏にノーベル平和賞（アパルトヘイトとの闘い）が授与される。

7月「入場税免税点の引き下げ」の動きに対し、10月「舞台入場税対策連絡会議」に結集する、芸団協・労音・労演・民主団体など、49団体・1300

人が入場税撤廃の請願とデモ行進が東京都内で街頭行動を起こした。全国的に取り組まれた撤廃署名も年末には20万人を超えた。その結果、免税点の引き下げを撤回させ、免税点を3000円から5000円に引き上げること成功。(労音例会の会費(入場料)は、日本人演奏家で平均3000円だった。)

市原多朗がパリオペラ座に日本人として初出演。『反核日本の音楽家』15人の作品が競作上演される。混声合唱曲『悪魔の宝飾』(森村誠一作・池辺晋一郎曲)が各地で上演される。日フィル裁判は二億三千万の和解金で12年ぶりに解決した。この年に逝去された音楽家、芸能人は田辺尚雄、長谷川一夫、有吉佐和子、服部知恵子、柳兼子、井口愛子、トリュフォー(ヌーベルバーグ)、カウントベシー、Aヤンソンス、Gヒツシユ、アンドロポフ(ソ連書記長)、ミシエル・フーコー(仏哲学者)。

1984年の労音の動き

第32回総会が146名の代議員の参加で開催される。新3ヶ年計画の最終年度に当たり、30年の運動から教訓を引き出し今後の活動に生かす目的に開催された。音楽界の現状分析として、「冠コンサート」

(商品のイメージアップ目的)の急増と、自治体による無秩序なイベントコンサートの増加が指摘され、「ぴあ」や「セゾン」をはじめ国鉄も準備中で、新たな問題が提起された。(音楽会や催事のチケット販売システム化方式)

新3ヶ年計画では、会員3万人・3000サークル・1000名の委員を目標とした活動は、

前年度と変わらない4000人に止まった。組織的力量の低下は克服されず、一時会員の比率は半数を超えており、委員サークルの減少が続いている。これらに対し、

1)入会制度の改善:サークル会員300円(個人500円)で年間有効、

2)毎月の小型版例会ニュースに3ヶ月毎に大型版を加える、

3)会員制度も年間会員制に移行、

4)映画チケットサービスも例会扱いとする。など、状況に対応した組織運営の変更を行った。

この年の例会活動の最重点は「モスクワ音楽劇場バレエ」例会の取り組み。労音運動にとつて初めての大規模バレエ団の招聘で、その成否は労音運動の真価を問われるものであった。全国労音共同企画として、全国18都市で32回の講演が行われ、その大部分は長期間準備を重ねてきた各地労音の主催によるもので、多くの場で成功を収めた。東京労音は、読売新聞との共催で10公演(17000人を組織)内容も高い評価を受け、その後の海外からのバレエ団招聘の基礎をつくった。東京労音としては、公園を成功させるため、早期に洋舞邦舞の著名な専門家による歓迎実行委員会の組織化と、協力団体として都教組・私教連・私大教連等2千の労組・民主団体に働きかけ多くの賛同を得て、多方面の宣伝を有利に展開し、更に公演には文部省・外務省の後援名義を取り付けた。その結果、労音を通して全体の75%(12000名)を組織できた。総会ではこの成功の要因を次のように纏めた。

1)「モスクワ音楽劇場バレエ団」と言う第一級のバレエ団を労音が招聘・主催して公演するこ

とを内外にアピールして、幅広い層から共同と協力を得た。

2)都教組を始め数多くの協力団体を得て、幅広く宣伝・組織活動が行えた。

3)共催の読売新聞社の社告と紹介記事により、バレエファン以外にも多くの人々に宣伝が浸透し、より多くの広がりを得られた。

4)最も重要なことは、バレエ例会の取り組みを『東京労音の再生』と位置づけ、東京労音の全機関が団結し、総力を挙げて取り組めたこと。

年末恒例の合唱付き第九交響曲(ベートーベン)例会には、ヨーロッパで活躍しているソリストのJメンゲドート(ソプラノ)Nフローゼ(メゾソプラノ)Fホーン(テノール)Vバルチネリ(バス)を、直接招聘し、合唱には300名の合唱団を組織し4ヶ月に渡る練習を準備した。例会は3例会5700名の参加を得て好評を博した。更に前年同様に、中国の張曉輝氏(笛奏者)の笛子協奏曲「走上高山望平川」が演奏された。東京で数多く行われる「第九交響曲」公演の中で、外人ソリストを起用したのは労音公演だけと言う事もあり、一般からのコンサート希望者が800人もいた。海外演奏家シリーズは、Rベンツ(独P)Rフスコ(伊P)Pパレチニ(波蘭P)、アゼルバイジャン民族アンサンブル、読響(ホルライザ)指揮/ニコラエフP)等で取り組まれたが、バレエの取り組みに追われ、十分な成果が上げられなかった。

ポピュラー例会では、「因幡兎」「武田鉄矢」「山崎ハコ」が、其々の特色を生かした聴き応えのある内容の例会になった。「河合奈保子」例会は、アイドルから脱却して本格的歌手を目指す意欲を

生かした、演出・構成が評価され、若者向けの企画として成功した。小ホール企画として、新人フオーク歌手「明日香」のソロコンサート、「平賀和人とTARKO」、「やとう宗幸と映画」、「伊藤豊昇」、「中牟田俊男」などが労資会館ホールで企画され、其々の個性を引き出した構成で話題を呼んだ。

伝統音楽に例会では、高橋竹山(津軽三味線)例会を東京文化会館の大ホールで、また秋には7ヶ所で地域例会(地域の伝統芸能と共演)として取り組み、地域の芸能家に注目された。春の「ふきの会」例会では、新曲「唐人お吉」タカクラテル作・平井澄子曲を車人形教室の出演で初演し、多くの聴衆に感動を与え、更に地域の民族音楽教室による、新曲「さくら」が取り組みを盛り上げた。

例会外の取り組みは、年初めの「新春の集い」に100名が集まり、日頃の教室活動の成果を生かした活動交流がなされ、労音運動推進の核としての確信を固め、新曲「さくら」の大合唱(平井澄子指揮)で交流を深めた。「スキー友好祭」は、上越国際に400名が集い交流を深めた。「夏の友好祭」は、富士山麓の西湖に、東京以外に関東・函館・播州の労音から300名が集い、交流を深めた。秋には労音運動の発祥の地、大阪のチサンホテルで、発足35周年記念「第30回全国労音連絡会議」が開催された。全国各地から代表300人が集まり、情勢分析から会員制度、共同企画、全国体制の改変、入場税撤廃など、多岐にわたる課題を討議した。全国体制は、全国事務局を議長団体の東京労音に置き、東京労音の事務局長が全国労音の事務局長を兼任することが決まった。全国の会員数は57000人。

年の初めに 兼平智恵子

○ 子の年 せっせ せっせと福運ぶ
○ 背伸びせず欲かかずチュウくらいがいい

皆様におかれましては、お健やかに新春をお迎える事とお慶び申し上げます。

昨年はふるさと風の会にとりまして六月に、まさかの白井啓治代表との別れがありました。もうお話しすることさえ出来ないと言う現実に立ち向かいながらの日々が流れました。

ねばり強く

ず っとずっと

み なで盛り上げようふるさと風の会

白井代表の教えを支えにしまして一同、新たな目標に向ってすすめて参りたいと思います。

昨年同様相変わりませずのご愛読とご高評のほどよろしくお願いいたします。



十二支の始まりは紀元前一六〇〇年頃、中国最古の王朝である殷(いん)の時代と言われています。

本来古代中国では十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)は方角や時刻、月(十二の月で一年となる)を表すものとして用いられ、十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)は日(三回で一月)を表し、合わせて十干十二支(じっかんじゅうにし)という暦年を表すことに使われました。

元来月を表す十二支は動物の意味はなく、しかし民衆にも十二支を広めたいという思いから身近な動物が当てられたと言われています。日本に十二支が伝わったのは六世紀の半ばで、江戸時代に入ると民衆の間で年回りや時刻を動物で表現する習慣が浸透しました。

ここで子の年の人の性格と特徴を調べてみましょう。

ねずみⅡ寝ず身 とされ、真面目にコツコツと働く人が多く、儉約家で不要な物にお金を使わないため、財を成すことが出来る。しかし度を超すとケチと噂されることもあるでしょう

鋭い勘とひらめきを持ち、どんな状況でもその危機察知能力を活かせば人生を難なく歩んで行けるでしょう。またどこでも生きて行けるだけに人や場所をえり好みしないので適応能力が高く、誰にでも合わせられるのが特徴です。

しかし恋愛となるとなかなか気持ちを打ち明けられず。しかしひとたび恋が実れば相手の為に一途に尽くします。相性の良い動物はしつかり者の辰年や申年、粘り強さと誠実さを併せ持った丑年

との相性が良好だそうです。反対に単独でいることを好む午年とは性格が合わず衝突する事が多いでしょう

と言うことです。どうぞ特に年男、年女の皆様、幸多き一年でありますように。

尚、子年は新しい運気の周期の始まりで未来への大いなる可能性を感じさせます。

福をもたらす大黒様の使いとして、また子供を産んで数を増やしていくことから「子孫繁栄」のシンボルでもあり、株式市場には「子年は繁栄」と言うことわざがあるそうです。

二〇二〇年、東京オリンピック・パラリンピックによる経済効果が期待されています。

最後に石岡市ふるさと歴史館にての第二〇回企画展をご紹介します。「舟塚山古墳とその時代」が昨年十一月七日から今年二月二日まで開催されています。

当会報先月号でもご案内いたしましたがお陰様で石岡市内、県内外の多くの皆様のご来館を頂いております。

舟塚山古墳はJR常磐線高浜駅からゆつくりと徒歩で約二〇分、石岡駅からではゆつくりと徒歩で四〇分、田園風景を楽しみながらの見学もおすすめします。

参考資料 十二支の民俗伝承

発行所 おうふう

※ 十二支の内、亥は日本では猪(いのしし)になります、中国では猪(豚)になるそうです。

一里塚を越えて

伊東弓子

新しい年を迎えて、先ず“お目出度う御座居ます”でしょうが、私には、この言葉が他人事ではなく、自分自身に迫ってきた何かを沁沁感じる近年となっている。

“元旦は 冥土の旅の 一里塚

目出度くもあり めでたくもなし“

毎年毎年私も含め多くの人が、ああ！また年が一つおおきくなる”“また年をとるな”と言ってきたし、多くの人の思いが、言葉になって聞こえてきたが一人一人は、どんな思いで言っていたのだろう。と改めて思う。

私が「人の死」を初めて経験したのは、小学校一年生の三学期、春を待つ三月だった。一緒に暮らしていたお婆ちゃんとの別れだった。一寸押したら団子虫のように丸くなって転がっていくんじゃないかと思う姿だった。七十二才と七才の孫の別れ、それから多くの人との別れがあつたが、今年はい長のお付き合いの人との別れが多かった。

Nさんのお母さんとの別れ、長女が六年生の時、“昔話を聞く会”を作った。下高崎で確り生きてこられた方々から、在りし日の出来事、漁の話、野良仕事の事等話して頂いた中のお一人だった。台の畑に行く道を“さくみち”というのも初めて知った言葉だった。五く六年一緒に過ごした杜宅の仲間が引越すというので、お別れの草餅つくりも教えていただいた。常に前向きで地域の人々とも協力し合ってこられた方で私も七十年もの時間を共有していただいた方だった。百五歳の長寿を全うされた。

Iさんは大学卒業と共に奥さんと二人で、玉里

に來られてからのお付き合いだった。新婚はやはや、活力溢れる活動、生活も故郷を遠く離れて、新しい土地での苦労は多かった事だったろうと、今になって当時が偲ばれる。青年活動、子育て、母親としての勉強会、農村女性の歴史、玉里の歴史と共に、古文書調査、文化財・野佛調査、玉里地区独特の稗蔵、玉里御留川等を住民主体に調査、記録まとめを指導し、残してくださった。信濃に帰られて地域のことを地元の方と調査し、記録やピーアール活動をしておられると聞いていた矢先のご不幸に、涙もなく晩春の山路を急いで走った。同年代の最大の師であり、五十六く七年の友でした。

然う然う、白井先生との別れは急だった。

私は霞ヶ浦周辺の歴史や文化を強く心に止めるようになった頃の出会いだった。一言一言に重みのあるお話が聞けた。仕事上では相当の厳しさを越えてこられた表情は常に穏やかだった。それなのに私からのお話しかけは暫くは出来なかった。その後、報告的な事は少しずつ話して、取り組み方などの助言を頂いた。一向に腕の上がらない弟子を見守って下さっていた。十七く八年のお付き合いでした。

Kさんとの別れは、あのベットのうえで話した三く四か月後の事だった。何事にも積極的に取り組み、努力される方だった。保育園始まって間も無い頃から小川地区の子供をバスに乗せて一緒に通って下さった。水郷地帯で大家族、多勢の姉弟の長女で農業もよくし、戦争中の生産活動も確りやってきたことを、物の扱い方は勿論、仕事上に沢山の教えを受けた。春の鹿島神社への交通安全祈願、夏の盆踊りバザーの金魚買いは故郷での思

い出を沢山話して下さつての案内だった。五十八
と九年のお付き合いだった。

○さんの死はあつという間の出来事だった。な
んと恐ろしい事だったろうと繰り返し思う。議員
現役中で、こういうメンバーがと思われる人達と
の集いの中での出来事の細かいことも分からず、
その後、真実も分からないままあつという間に消
えてしまった。お父さんを若くして亡くされ、家
族を支えてきた人だった。

Kさんとは、選挙に係わることからのお付き合
いが始まりだったが、私たち姉弟の事は「子供の
頃から、よくわかっていたよ」とのことと、とて
も身近かさを感じた。日頃も人の出入りが多かつ
た所為か、いや人柄でしよういつも平らな方だつ
た。バイクで小川迄も用足しや姉さん宅へも行く
元気な姿や草刈り仕事は年を感じさせなかった程
で、人形づくりは農村地帯の大人や子供、現代の
男の子や少女を拵えて楽しんでらされていた。晩
年は何うと昔話しをして下さった。その後必ず、
田の向こう側の森を指して「お父さんがいるから」
と嬉しそうに話してくれた。

Mさんは背が高く姿勢のよい人だった。私と息
子が大分遅い時間に高浜田園を歩いている時、「遅
く大変だね。私は下玉里のMという者で、可笑し
い者じゃない。乗せて行きますよ」といつてくれ
た。又、寺の集りの時、冬の時の鐘突きの事で、住
職を心配して「冬の間だけでも寒さがよくない。
一時間もずらすか、テープで流すとか何とかして
みてはどうかと心配してくれたことがあつた。の
に……。最後の弔いも弔って貰いたい人には弔つ
てもらえず……。思うと業の悲しさを深く思う。

姪のご主人とは短い別れだった。姪夫婦が来る

というと必ず妹の家に行った。暖やかな人で話し
も弾んだ子供達の遊ぶ姿を優しい眼差しで眺めて
いたり、相手をしていた。若い人との別れは辛か
つた。七、八年のお付き合いだった。

Nさんとの別れは、Nさんの兄嫁さんから聞い
た。都会に出て確り働いて生きて来た友、最後は
一人になって、兄嫁さん、甥っこさんに守られて、
先祖の元で眠ることが出来た。小学校一年の時か
らの友、仕事についてからも同窓会で皆と旧友を
温め合った一人だ。

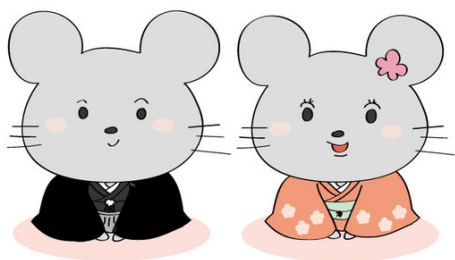
Iさんの死は、本人のことよりも奥さんだった
友のことを思い出した。家庭の中でも辛い思いば
かりの日々が長く続いたと聞いた。誰でも多かれ
少なかれの辛さはあるが、あまりにも酷かった。
偶に私が尋ねる事を心待ちしてくれた。そんな中
で聞いた話の中に、強い意志で語ってくれた事
があつた。友は自分が先に逝くなど思つてもいな
かつたようで「旦那が亡くなったら、内の土地に
ある、あの銅像は退かしてもらうんだ。もう、い
やでいやで仕様がないう」と何度も話してくれた。
しかし友は先に逝つた。あの銅像はどうなるのだ
ろう。一応友（お母さん）の思いは息子さんに伝
えておこうか。中学校から一緒に青年時代も一緒
私を頼ってくれての付き合いは、六十年以上もの
月日だった。

そのほかにも沢山のひととの別れがあつた。年数
の長さ、お付き合いの切っ掛け、いろいろな形は
あつてもお互いに感化され、お世話になり、助け
られながら生かされてきたのだ。一人一人が私に
伝えてくれたものは何だったのだろうと思う。私
の心の中に生かされていることはやがて、子や孫
にと伝わっていくことだろう。「死んだらおしまい

だよ。骨が残るだけ」とよく聞くが、本当にそう
だろうか。そうではない。私も形ある限り、心を
振り替きながら精一杯いきたいと年の始めに決心
した元にてるお婆ちゃんと一緒にうたつた歌を唄
いながらいきたい。「ごぶごぶ節」と孫たちが付け
た歌。

長けりや 短かいごぶごぶよ
遠けりや 近いごぶごぶよ
多けりや 少ないごぶごぶよ
みにくきや きれいだごぶごぶよ
暑けりや 寒いよごぶごぶだ
悲しけりや 嬉しいごぶごぶよ
食べれば 出しますごぶごぶよ
産れりや 死にますごぶごぶよ

原稿〆切も過ぎた二十八日、会員のメンバー
尊敬する菅原さんが亡くなりました。



筑波山梅林

小林幸枝

昨年中は、色々お世話になり、本当にありがとうございました。
今年もよろしくお願いいたします。

筑波山梅林展望四阿(てんぼうあずまや)というところをご存じですか？

このあずまやは、関東の名峰筑波山梅林を見下ろす展望台です。たまたま通った道で見つけて立ち寄ってみました。

高い山をなかなか望むことができない関東平野を北上して最初に目にする象徴的な山が、双目峰の筑波山です。

南側に面した中腹の標高約350M付近には、つくば市営の梅林があり、梅が見頃となる時期には多くの観光客が押し寄せます。

この梅林や関東平野を見渡すことができる格好の場所に近年建てられたのが展望四阿です。

これが、懸造りで、しかも茅葺き屋根という非常に味わいのある建物に仕上がっています。

白とピンクのたくさんの梅の花が見渡せる絶景のロケーションにあり、梅見は毎年2月中旬頃からが良いようです。

是非、みなさんも梅見に訪れ、このあずまやからの眺めを楽しんでみてください。



父のこと(17)

菊地孝夫

10代から20代にかけて、性的な悩みがあり、とうとう思い切って父に相談した。「なんだそんなことか」と笑い飛ばされるかと思ったが、「ちよつと行こう」と言って、そばの小学校の校庭に誘われた。

「海軍にいたころ、機会はあったのだが、俺はお前のお母さんしか女を知らない。トルコ(今のソープランド)へでもいったらどうだ」という。

結局、父と話したことで、それまで深刻に思い悩んでいた悩みが解決してしまった。

叔父の一人、が老年性の鬱になって引きこもりになってしまった時も、無理やり誘いだして、二人してそのころ石岡にあったストリップの見物に行つたという。如何にも父らしいやりかただなと思つた。母が苦笑いしながらその顛末を話してくれた。父としてはショック療法のつもりだったと思うけれど、こちらは効果がなかったようである。

江戸落語に、家にもつて本ばかり読んでいる大きな商家の跡取り息子を心配した大旦那が、偽の学者先生を、使つて吉原へ誘い出すという一席がある。実はこの先生は幫間医者と言つて、医者とは名ばかりで、もっぱら豪商などを客とする、高級太鼓持ちである。

息子は言葉巧みに、生け花の手習いと騙され、偽の学者先生は、大旦那からたつぷり金を持たされているので、生け花の会、実は置屋と言う吉原の大店へと連れていかれる。当時の花魁は、たしなみの一つとして、生け花の心得もあるので、この息子はすっかり騙されてしまう。お堅い書物ばかり

り読んでいた世間知らずだったので、そのような場所があることなどついぞ知らなかったのである。やがて、花魁の手練手管に、息子はすっかりメロメロになってしまい、挙句の果ては、吉原に入りびたりのいっぱしの遊び人になってしまうという落ちがついている。

今にして思えば、父がこれを使えと言つて、大金を渡してくれたら、とも思うのだが、生憎と私の家は金持ちではなかったので、落語のようにはいかなかった。

数年後、親会社の人が技術指導の為に幾日か泊りがけで工場へ出張してきた。別の県からなので電車でやってきた。その接待を命じられて、夕刻旅館へと案内することになった。

「夕飯でも一緒にどうですか」と言うのと、

「そんなことはないから、土浦のストリップ場へ連れて行け」と言う。

「行つたことがないので、場所を知らない」と言うのと、

「いいから、いいから、とにかく土浦へ載せて行け」と言う。

土浦の駅近くの駐車場に車を止めた。

「誰かに場所を聞きましょうか」と言うのと、

「こつちだ、こつちだ」と言つてさつさと歩きだした。確かにそこに劇場があった。

「どうして知っているのかな」と、首をかしげている私をしり目に、さつさと二人分の入場料を払うと、最前列に陣取つた。まだ昼間と言つていい時間帯だったので、客席もまばらだった。

駒田信二氏の「一条さゆり」と言う有名な踊り子の一連の小説を読んでいたので、こういう場所はどうなのかと言う興味も無くはなかったが、と

でも一人で来る勇気などはなかった。

「入場料を払ってもらったのでは、接待にならない。帰ってからどう報告しよう。」などと思いついて、開演となった。

何人かの踊り子が次々に登場し、ステージが始まった。七色のスポットライトを浴びながら、お決まりの華やかな音楽に合わせ演技が繰り広げられた。

幕間に、コメディアンが出てきて、コントが始まった。引込むときに、

「私なんかを見ても、お客さんは楽しくないよね。とつと引込むことにしよう」と言いつつ下手に消えていった。私には、ストリップなんかよりもこのコントのほうがよっぽど面白かったのだけれども。

（後年ドラマなどの脇役で、このY・Kと言う芸達者な俳優を幾度か見るようになった。ああ、あの時のコメディアンだな、と記憶が甦った。）

くだんの技術者というと、踊り子が登場するたびに身を乗り出して「うん、うん」と満足そうにうなずいていた。

山梨の行商人のせがれだ、などと同僚から揶揄されていたこの方は、すっかり上機嫌で群馬県へと帰って行った。

後になって私が出張した時、「特別に役員専用のクラブハウスを用意したから」と言っ、いつもの汚い木造の古い寮ではなく、立派な施設に泊めてくれた。

「おれたちだって泊まれないんだ」と言う。いったいどのように裏から手を回したのだろうか聞きそびれてしまった。

精神的、肉体的にきつい勤務ではあったが、この

ように聊かの息抜きがあったことも事実である。

さらに数年たって、水戸に転職してからののはなしになるが、同僚たちと連れ立って一杯飲んでから水戸駅前の劇場に行ってみようという事になった。その時、びっくりするようなことに遭遇したのだが、そのいきさつはここに書くわけにはいかない。読者のみなさんの御想像にお任せすることにしよう。

「昔話について」(二)

木村 進

蜘蛛の糸

「昔話について」 前回のカニの恩返しに引き続き、残しておきたいと思った話の第2弾は、あの有名な芥川龍之介の「蜘蛛の糸」です。

学校の教科書にも大概載っていたと思いますので、知らない人もほとんどいないお話です。

小説家芥川龍之介が始めて書いた児童向けの小説です。大正7年(1918)に鈴木三重吉がはじめた『赤い鳥』の創刊号に最初に発表されました。

内容をWikipediaに書かれた内容から書き写してみます。

「釈迦はある日の朝、極楽を散歩中に蓮池を通して下の地獄を覗き見た。

罪人どもが苦しんでいる中にカンダタ(犍陀多)という男を見つけた。

カンダタは殺人や放火もした泥棒であったが、

過去に一度だけ善行を成したことがあった。

それは林で小さな蜘蛛を踏み殺しかけて止め、命を助けたことだ。

それを思い出した釈迦は、彼を地獄から救い出してやろうと、一本の蜘蛛の糸をカンダタめがけて下ろした。

暗い地獄で天から垂れて来た蜘蛛の糸を見たカンダタは「この糸を登れば地獄から出られる」と考え、糸につかまって昇り始めた。ところが途中で疲れてふと下を見下ろすと、数多の罪人達が自分の下から続いてくる。

このままでは重みで糸が切れてしまうと思ったカンダタは、下に向かって「この糸は俺のものだ。下りろ。」と喚びた。

すると蜘蛛の糸がカンダタの真上の部分で切れ、カンダタは再び地獄の底に堕ちてしまった。

無慈悲に自分だけ助かろうとし、結局元の地獄へ堕ちてしまったカンダタを浅ましく思ったのか、それを見ていた釈迦は悲しそうな顔をして蓮池から立ち去った。」

このようにあらずじだけ書くと、この小説のよさが何も伝わらないが・・・今では青空文庫などでも無料で読むことが出来る。

最後の部分だけをここに載せておきましょう。

「御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいました。やがてカン陀多が血の池の底へ石のように沈んでし

まいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとするカン陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼（うてな）を動かして、そのまん中にある金色の蕊（ずい）からは、何とも云えない好い匂が、絶間（たえま）なくあたりへ溢（あふ）れて居ります。極楽ももう午（ひる）に近くなつたのでございましょう」

やはり小説家の文章は違いますね。
ではこの話はどこから思いついたのでしょうか。

（1） もつとも有力視されているのが、宗教家ポール・ケールが1894年に書いた『カルマ』を、日本の禅の大家である鈴木大拙が翻訳して出版した『因果の小車（いんがのおぐるま）』であるといわれています。

この話は、やはり蜘蛛の糸が題材に使われています。国会図書館デジタルコレクションでも読むことが出来ますが、内容が難しすぎて全部を読むのは大変です。

これが発表されたのが明治31年9月。

この蜘蛛の糸に引用されたものはごく一部で、「慈悲深い僧侶が、懺悔する悪人・マハードータ（摩訶童多）に諭す時に、この話をひとつの例として聞かせています。

それによると、昔、カンダタという悪人が地獄で苦しんでると、仏陀が現れ、まったく話のストーリーは芥川の蜘蛛の糸とほぼ一緒になるのです。そして、最後に、僧侶は次のように諭すのです。「ひたすら上を目指せばカンダタは救われたし、実は大勢で上の方が容易なのだ。

にも関わらず、彼は我執にとらわれて、下に心をとりわけてしまった。

我執こそ地獄、正道こそ涅槃だ」と。

これを聞いたマハードータは「私に蜘蛛の糸を上らせてください。地獄から抜け出せるよう努力します」と。

元の話は禅の思想を示す話ですが、芥川の話にはこの話は省略されています。余分なものは書かない方がいいのでしょうか。

（2）スペイン、イギリス、スウェーデンなどに伝わる話。

こちらはキリスト教の伝説的な話になっていて、地獄にいる母親を引き上げようとしたが、後ろからしがみつく魂や人々に悪態を付いたため、地獄にまた落ちてしまう話となっています。

（3）ドフトエフスキーのカラマーゾフの兄弟・・・一本の葱（ネギ）

この長編小説の中にたとえ話として載っている話があります。

「昔むかしあるところに、それはそれは意地の悪いひとりの老婆さんがいて死んだの。

その老婆さんは生きているうちにひとつもい

ことをしなかったで、悪魔たちに捕まって、火の海へ投げ込まれたの。

老婆さんの守護天使は、何か神様に申し上げるような良い行いが思い出せないものかと、じつと立って考えているうちに、ふと思いついて、その老婆さんが野菜畑からねぎを一本抜いて乞食にやったことがあるのを神様に申し上げたの。すると神様はこうお答えになった。

それではその一本のねぎを取って来て、火の海にいます老婆さんに差し伸べてやり、それにつかまらせてたぐり寄せるがいい。

もし火の海から引きあげることができたら、天国に行かせよう。

でも途中で千切れたら、老婆さんは今いる場所にとどまるのだと。

天使は老婆さんのところに走って行ってねぎを差し伸べ、さあ老婆さん、これにつかまってあがつて来なさい、こう言って、そろそろ引きあげにかかったの。

すると、もうひと息で引きあげられるという時に、火の海にいた他の罪人たちが、老婆さんが引きあげられているのを見て、一緒に引きあげてもらおうと、我も我もと老婆さんにつかまりだしたの。

老婆さんはそれはそれは意地悪だったので、みんなを足で蹴散らしながら、『引きあげてもらっているのはあたしで、お前さんたちじゃないよ、あたしのねぎで、お前さんたちのねぎじゃないよ』と言ったの。

老婆さんはこう言うやいなや、ねぎはぷつりと千切れてしまい、老婆さんは火の海に落ちて、今だにずっと燃えているの。

天使は泣く泣く帰って行った。」

こんなお話です。スウェーデンの民話に近い話になっています。ただここでは糸ではなくネギが出てきます。

〈4〉日本の民話 … 山形県、福島県、愛媛県などに伝わる民話「地獄の人参」「腐った人参」

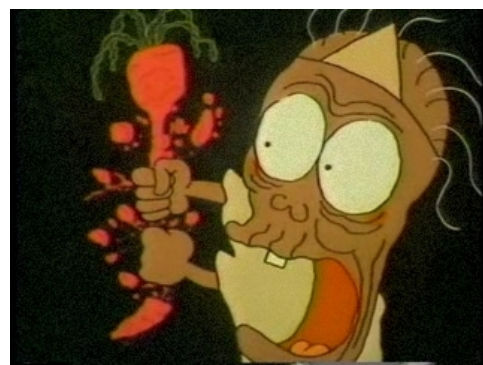
ここでは、まんが日本昔ばなしで紹介された「地獄の人参」のあらすじを載せておきます。

「昔、悪たれ婆さんが死に、生きている間にあくどく貯めた金を握りしめて、地獄に落ちた。

婆さんは、全てのお金をえんま大王に差し出し、極楽に行かせてもらえるように頼んだ。するとえんま大王は「ばかもの。極楽に行かせてもらうには、良いことをしたことのある者でなければならぬ。」と言った。

婆さんは「わしは一度だけ良いことをした。旅の乞食坊主に腐った人参を渡した事がある」と言い、しばらく考えていたえんま大王は「たとえ腐ったニンジンにせよ、人に施（ほどこ）し物をするという心があったならば、極楽に行かせてやろう。血の池に浮かぶ人参にすがれ。」と、婆さんに言った。

婆さんは「これで極楽に行ける」と大喜びし、血の池に浮かんでいた人参を手にした。人参は婆さんと一緒にすると極楽に向かって高く高く登りはじめたが、この様子を見た他の亡者たちは次々に婆さんの足につかまった。



(まんが日本昔ばなし より)

焦った婆さんは「大勢の人が捕まったら、その重みで人参が崩れてしまう」と、足につかまる他の亡者たちを足でけり落とした。と同時に、婆さんの持っていた人参はホロリと崩れ、婆さんは再び地獄に落とされた。

自分さえ良かったら他人はどうでもいい、という卑しい根性だった婆さんは、結局極楽へは行けなかった。この様子を見ていたえんま大王は「やつぱり悪人は悪人だったな」と言い、極楽の仏様は小さくため息をついた。」

この民話が何時作られたものかは不明で、意外に新しいのかもしれない。

でもキリスト教の民話では「ネギ」であったのに、ここでは「人参」しかも「腐った人参」になったのでしょうか。

でも人参は人参でも「朝鮮人参」だったらどうでしょう。ヒゲの長い人参を思い浮かべると、少し見える景色が違います。髭人参などという高級

な薬草になる人参があります。

でも欲の多い婆さんがケチでお金を溜め込んで死んでも、ろくな事にならないというたとえなのでしょうか。

今でもいかにもそんな金持ち婆さんがいそうですね。

けちな金持ちは貧乏人から搾取して、自分は何もしないなどという話も聞こえてきます。

自分が損をするなんて、とんでもないようです。

何も自分はしていないのに、隣の人に何かお金が入るだけで、自分が損をしたと思うらしいです。隣の人が宝くじを当てたらどんなことになるのでしょうか。

「情けは人のためならず」なんて言うことわざも、きつと間違って理解しているのかもしれないですね。

追悼 菅原茂美氏

菊地孝夫

木村進さんより電話があつて、訃報を聞いた。過日お見舞いに病院に行った際も、病状は進んでおられるように見えて、いくらか話をするのが叶わなかった。

先日の白井代表に続き、相次いで菅原氏を失ったのは、ふるさと風の会にとっても大きな痛手である。

この風の会に入会するにあたって、もう一つその動機となったのは、菅原さんの達意の文章であつた。

得意とする生物に限ったことばかりではなく、天文学や人口増加に伴う食糧問題など、論点は多岐にわたっていた。できうれば、病に打ち勝ち、再び原稿を寄せられる日が来ることを切望していたのは、ひとり私だけではないと思う。

幾度か直接、菅原さんのお宅にお邪魔し、お話を伺ったこともあった。奥さまに連なる、笠間十勇士一族の話。そして、それにまつわる謎めいた石像の事。

自慢のお孫さんたちの事を、いかにも嬉しそうに話されたりしたこともあった。

岩手県水沢での少年時代には、裸馬に跨って野山を駆け巡った話。それが後年、獣医師となるきっかけだったのだろうか。

夏の日、体調を崩されていたにもかかわらず、庭で育てている植木や野菜などのお話も聞き、少し変わった隠元豆の種を頂いたりもした。植物を枯らす迷人なので、ほかの人はうまくいったが、私一人、発芽はしたものの、すっかり枯らしてしまった。

或る時語られていた、狼が巷間言われている如く、人間に対する害獣ではなく、気高い生き物であるという話には、私も全く同感である。

神聖ローマ帝国の始祖、ロムルスとレムスの双子の幼児をその乳で育てたのは、ほかならぬ母狼であると語り伝えられている。

近代でも、狼に育てられた赤ん坊が時々見つかり、ニュースになる。それらの子供たちは、結局人間と同化せず、狼のまま短い生を終える。

いつしか時の経つのを忘れて、早く帰らねばと思いつつ、それからそれへと長話になってしまったこともあった。そのあと体調を崩され、入院され

たと聞き、その原因の一端は私にあると悔まれた。

幾度となく病魔に襲われたにもかかわらず、その都度回復されたとも伺った。病気によって、すでに片目は失明に近いとも話されていた。体調が万全ではないにもかかわらず、病を押して会報の印刷に参加され、また多くの現稿を書きつづけられた。

全く頭の下がる思いがする。

2018年に始まった交流も、僅か2年足らずで終局を迎えてしまった。あれはいつの日の事だったろうか。

風の会の例会の時、隣に座る私に、一枚の棋譜を示して、

「こんなのわかるかい？」

と、尋ねられた。

今にして思えば、

「今度一緒に盤を囲むかい？」

との、お誘いだったのかもしれない。菅原さんの囲碁の腕前のほどは、そのお話の端々でわかっていたので、定石すら知らない私は気後れしてしま

い、

「ぜひ一度お相手頂きたい」

とは、とうとう言いだせなかった。

拙稿を読んでいただいていたらしくて、その感想を話されたこともあった。小生の数少ない大事な読者を失ったことにもなる。

先日、ようやくにしてまとまった、鬼澤大海が著した「常陸国旧誌」の現代語訳を、一冊の本のかたちにしてお目にかけ、その感想を聞かせて戴き

たかった。

私が「ふるさと風の会」に入会する以前の、会報に寄せられたいくつもの文章は、美味しいものを後に取っておくように、いつか読もう読もうと思

って大事に取っておいた。

脳裏に去来するのは、いくつもの思い出ばかりとなっていました。

このような時、言葉は無力である。

惟城の長雨 輕塵を潤す

客舍清々 柳色新たなり

君に勧む 更に尽くせ一杯の酒

西の方 陽關を出ずれば故人無からん

萬感胸に迫りて 言辞を失い

短日の交誼 その姿も留め得ず

長幼は或ると謂えども その垣を取り払い

歓談尽きる事無く いつしか時を忘れ

陽光 既に西に傾く

これを以て哀惜の辞に替えることといたします。

【風の談話室】

《読者投稿》

やまと暮らっ (35)

やまと女

主のいなくなつた、隣のビワの太木。主がいなくてもビワの花は咲いた。たくさんの小さな花が、次々と開花させ微かに香りを漂わせている。

・ サフランの花が咲いた、殺風景な畑に鮮やか

な花が咲き、数日間に亘り楽しませてもらった。サフランは、蕾が膨らむと次の日には花が咲き、そして次の日には萎んでしまう。ウツカリすると、開花した花を見ないうちに、終わってしまう。

・友人の車に同乗し走っていると、あつ！ちよつと待って写真撮るから・・・と、車を降りて山の方を見上げると、幻想的な景色に見とれる。山々に霧がかかり刻々と様子が変わる。まるで、まほろばの郷・・・を見ているよう！二人とも感動して景色に酔った。この瞬間、感動を語り合える友がいて本当によかった。

・今年の春に仲間と仕込んだ味噌、その味噌上げをした。色も、香りも、味も、上々です、1キロずつ袋に詰めた・・・これで来年も元気に過ごせる。刻々と変わる今日の夕暮れでした・・・。

・今日は竹細工の日、麻の葉編みに挑戦・・・六つ目編みを応用した編み方、仕上がりがふんわりとして優しい。根気強い指導のおかげで何とか底の部分が仕上がった。根を詰めたからと、師匠は二度もコーヒーを入れてくれた。仕上がりがとても楽しみ・・・。

・東京からやってきた友人夫妻とフラワーパークのイルミネーションを楽しんできた。二階からの眺めは全体が見渡せて素敵なお光のショーだった。コーヒーを飲みながら窓の外をぼんやり眺め、贅沢なひと時を楽しんだ・・・。

・街はクリスマスモードで賑わっていた。忘年

会で北千住まで・・・お店が見つからず地図を見ながらうろろろしていると、突然に20代の若者がどこかさがしてしまか？と声をかけてくれ、近くまで道案内をしてくれた。なんと有難い事30分も行った来たりしていたのに。久々に爽やかな気分です忘年会に合流できた。

・師走に入り冷たい風が身に沁みます。オリーブさんでのエコクラフトの日、みんなそれぞれの物を編んでいます。クリスマスも近いのでクリスマスにちなんだ小物なども・・・。土曜日はオカリナとギターのコンサート、エコクラフトの仲間が創った作品を飾りクリスマスのムード作りをした。

・カフェオリーブさんで行われたクリスマスコンサート、たくさんのお客様にきていただいた。ギター、オカリナ、キーボード、カホンによる演奏とみんなで一緒に歌う。笑いあり涙あり、楽しい2時間のコンサートだった。演奏前にコーヒーとケーキを食べながら、久しぶりの友人たちとの会話が弾んだ。休憩時間には、木下から市民会館での石岡寄席、来年の大相撲石岡場所の宣伝・・・。石岡応援者として抜かりなし、そしてイギリスからの可愛いお客様もいて和やかに・・・。

・温かさに誘われて友人たちと観光果樹園十三塚へミカン狩りに行く。筑波山のおもとお郷側に位置するこの地域は柿、りんご、ミカン、ナシいろいろ採れる豊かな地域です。先日までオレンジ色に染まっていた柿畑はすっかり葉を落とし観光客もまばらで寂しくなっていた。それでもまだ、

リンゴ狩り、ミカン狩りは楽しめます。先週は知人の果樹園では、リンゴ狩りを楽しむ団体さんで賑わっていた。

・今年も余すところ5日ほど。エコクラフトの仲間も毎週よく頑張りました。皆勤賞の仲間も数名。オリーブのママ、いつもありがとう。来年もみんな元気で集まりますように・・・。

《風の呟き》

冗話集

菅原茂美(故)

先報に続き、アホな話は、永久に尽きまじ。

◎私は今、紳士面していたって若気の至りで、相当のいたずらをしたもんだ。学寮にいた頃、悪友とともに盛岡の街を飲み歩き、女子寮と男子寮の表札を深夜チャッカリ取り換えた。

◎世界一の美女は、長年ローマの休日のオードリー・ヘップバーンと結論。日本一の女性歌手は無をいわず市川由紀乃。先日石岡市民会館でライブがあった時、運よく彼女と握手ができた。孫達に由紀乃の臭いが消えるから、お爺ちゃん明日から3日間、顔を洗わないと言ったら、ミーハーだねと軽蔑の眼差し。

◎北極と南極でどちらが寒い？ 北極は海の上だから遥かに温い。南極の極点が高い山の上故、遥かに寒い。南極平均気温(一)20℃で最高は、

(一) 89.2℃(標高3488^{メートル})。北極平均(一) 6.2℃で最高は(一) 42.2℃。

◎昭和30年代末の頃、未舗装の田舎道を車で走っていたら、道路の左端に砂利の山。私はかなり酔っていたので、砂利山を見逃した。丁度その時対向路線をトラックがこちらに向かっていた。砂利山に乗り上げた私の車は、ハンドルを取られ、正面衝突。平謝りに頭を下げた。トラックの運転手『なんだおめえ、酔っぱらってんなら、しょうがねえ。勘弁してやっぺ。気を付けて行きな!』良き時代。

◎妻の叔父風間秀元氏と二人で、神奈川県藤沢市の長生院(小栗城主と家内のお墓がある)というお寺へ参詣の折、寺の住職に私共は、殿様の子孫だと言ってくる人は数多いが、家来の子孫だと名乗り出てきたのは貴方達が初めて。正直でよろしい。と褒められた。妻の先祖は、石岡歴史資料館に「風間阿弥陀」の像があるが、妻はそれにあつたる風間家21代目。2代目の先祖が小栗十勇士「風間次郎正興」。小栗十勇士は、市川猿之助が91年新橋演舞場で歌舞伎を演じた武将の一人。殿は桓武天皇から4代目「国香」の子孫で、平重家から15代目小栗次郎平助重である。1423年小栗城(旧協和町)は、足利持氏の攻撃により落城。殿と十勇士は三河の親戚を頼る途中、府中城に3歳の風間家4代目風間三郎正光の養育を頼んで落ち延びるが、途中藤沢で毒殺された。助重の若殿満重と照手姫との恋物語が主題。猿之助の立体的演舞は忘れられない。

◎私が国際協力事業で、中米に赴任していたころ、ある居酒屋に入ったら、壁に何やら、弾痕らしきものがある。訳を聞いたら、店主、これは先日客同士がさもないことでケンカになり、拳銃を打ちあつたんですよ。いまでも西部劇さながら。

◎私は現役時代、「家畜伝染病検査項目」の一つである蜜蜂の「腐蛆(ふそ)病検査」(ウジ虫が腐る病気)の折、密かに基盤をもって出かけた。仕事が終わる予定。待ち合わせ、巣箱を台にしてしじみ基を打った。ところが侍は基の最中、一発ハチに刺されて顔が真ん丸。役所に帰ったら、牛の検査に行った人が、なんでハチに刺されたんだと責められ、白状する他なし。昔は真に良き時代であった。

◎学生時代、友人を我が生家に招待。駅を降りたら我が家の近所の超美人の高校生も降りた。我らは、彼女から数十^{以上}先を、即(つ)かず離れず歩いていった。すると友人は、人通りの少ない場所で、わざとマフラーを道端に落として知らん顔前進。魂胆は彼女に拾ってきてもらい、近くで顔をしじみ見たい。ところが、どこかのおっさんが突然自転車で見れ、マフラーを拾ってきてくれた。魂胆もばー。

◎認知症の爺さん、金物屋に入るなり『なんだこのバケツ、底が空いていて、入り口が塞がっているじゃねえか』店主曰く、『逆さまに置いといたけなんですよっ!』

◎私の知ってる友人。弁当作る工場の課長。収めた弁当が、ある女子高で、髪の毛が入っていたとかで、クレームの電話。早速代わりの弁当をもつて謝りに行った。スケバンらしき女親分が、超短いスカートで床に座り胡坐。相手が座れば、こちらも座るほかなし。頭を下げて謝ったら、なんと目の前に飛び込んできた光景は絶景なるかな。後は想像にお任せする。いやはや、困り果てて大喜びとか。

◎世の中は何もかにも偶然のなせる業。先ずは親の結婚。自分の誕生、成長。進学、就職、業績、結婚、家族、健康、友人、現住所と全て偶然の積み重ね。現在はこの狭い石岡市に居住しているが、心は常に宇宙を駆け巡る。

〔宇宙座標 俺の居る場所 どこかいな〕

(編集部より：本文は菅原茂美氏の残された雑文から載せています。今頃は宇宙座標のどこかに行つて此方を笑つて眺めておられる事でしよう。今まで沢山のお話いただきました。心より、ご冥福をお祈りいたします)



孤独な記念碑

打田昇二

「人は死んで名を残す」と言う諺がある。いわゆる「征服者」「成功者」などは自分の功績を後世に残したいから記念碑などを建立するのであるけれども、時代は急速に変化してゆくから其れを立てる場所を慎重に選ばないと、折角の大事業と言うか、本人の希望も後世に伝わり難い。

アレキサンダー大王以前に中央アジアからエジプト辺りまで支配していたのはアケメネス王朝ペルシア帝国らしいが、其の王の一人であったダarius大王は、事情は知らないが本来は王になれる人物ではなかったとされる。つまり日本だと豊臣秀吉のような成功者である。秀吉の場合は、誰かが「大閼記」を書いてくれたけれどもペルシアには親切な人が居なかった。そこでダariusは自分の功績を古代ペルシア語・アッカド語・エラム語の三種文字で石碑に記録することにした。しかし、平易な場所だと壊されてしまう心配がある。

慎重に選んだのが、イラクとの国境に近い古代シルクロードの古都市ケルマンシャー（現代のバフタラン）からホラサン街道へ抜ける街道脇の岩山であり、其処に立派な碑文を刻み込んだ。現地語では「円柱が無い」と言う意味の「ビストウン」と呼ばれていたが、碑文は現代から二千何百年も前の文字であるから誰も解読できない。

近世まで無傷・無名で残ったが、一八〇〇年代にローリンソンと言う英国の軍人兼外交官が独学で学び努力して三種文字を解読し専門誌に発表した。そのビストウンは有名になった。然し、何しろ現代でも辺境の地に在る不便な場所の危険な崖上であるから訪れる者も少ない。日本の様に古跡が

容易に見学できる国は貴重なのである

或る国のこと

打田昇二

地中海沿岸からアフリカ大陸にかけてはかつてローマ帝国などが侵略支配し植民地とした地域に多数の城砦遺跡が当時の俦で存在している。其の中でも「巨大遺跡の宝庫」として知られているのが、エジプトの隣国リビアである。此の国は大部分が砂漠だが其処から石油が産出するので、北朝鮮は早くから現地に多くの出稼ぎ労働者を派遣しており両国の友好関係は良くなる。

大日本帝国は資源が少ないのに面子に拘るから其の様な国とは距離を置くようだが国民は正直なもので、首都（トリポリ）には日本から輸入された中古車が町中に溢れていて「〇〇商会」などと書かれた車が走り回っていた。かつて、リビアは「王国」であつたらしいが、軍人による革命が起きて王政が廃止され、主導したカダフィ大佐が国のトップになった。余計なことだが私は現地で「国のトップなのに大佐の俦で良いのか？」と聞いたところ「：軍の階級が大佐までしか無い：」と言われた。

独裁的になれば敵が増え、国は衰える。カダフィ氏も図書館には自分の著書以外は置かせず、国会開会中は商店を閉めさせるなど横暴な政治を行い、普段は国中を車で走り回っていたらしい。首都は賑わっていたが裏通りへ行くと道路は降雨で下水が溢れる状態であつたから繁栄は覚束ないけれども、其の後のリビアはどうなったのか？

中近東の情報は日本に伝わって来ないけれども「宝庫の巨大遺跡」が気になる。

カラスは嫌われ者？

木村 進

鳥の鳴き方は人によっても違って聞こえるし、国によっても違うようです。車で信号待ちしていたら、隣りの反対車線にカラスが道路に落ちていた。エサをついばんでいた。こちらを見て首を傾げたような仕草をしておどけたようにも見えた。真っ黒で愛嬌などは感じないのだが、人間に嫌われてばかりではかわいそうだ。

このカラスは「カアカア」などと何時も表現されるが、英語でも「CAW」というので世界共通なのであるか？

ところでロシアのモスクワの赤の広場に近い公園で昔、白いカラスを見かけたことがある。

白いといっても真っ白ではなく、腹と背中の一部が白っぽい灰色なのだが、やはり珍しく感じた。またこの国では普通に沢山いるようだ。

「カラスは黒い」とは、世界中共通であると思っていたが、そうでもないようだ。童謡などでは「からすの羽根は何故黒い？」とか「白い羽根を拾って体につけて、他の鳥の仲間になろうとしてバレタ話し」などいくつもでてくる。

どれも良いイメージは持たれていないらしい。

日本書紀や古事記には八咫鳥（やたがらす）という三本足のカラスが登場する。

神武天皇の東征で、大和に上陸したとき、熊野・吉野などの道案内をしたという。

元々は中国の故事に出てくると言うが、太陽神に関係するようだ。神武天皇は太陽の上る方向へ進

のだが、ここでは地元の豪族に敗れ、南周りで進んだ。何か関係があるのだろうか？

またこのカラスは縁起物としてサッカーの日本代表チームのユニフォームのマークとしても使われている。この八咫鳥が特別というわけではなく、昔は、カラスは嫌われ者ではなかったのではないだろうか。

枕草子にも家路に帰るカラスが出てきたと思う。またカラスの鳴き声は童謡「七つの子」に登場するので家路に帰るイメージがあるのかもしれない。しかし、カラスはとても頭の良い鳥で、かなりの知能を持っている。

それなのにどこの国でも嫌われ者のようだ。アメリカ映画「白いカラス」はユダヤ人と偽って暮らしてきた黒人の元大学教授のこころの闇を題材に黒人問題を扱っている。しかし、映画の英語でのタイトルは「The Human Stain」（人間のシミ？汚れ？）というもので、カラスなどという言葉は出てこない。日本語に直した時のものだ。これも日本人の感性なのかもしれない。



【特別企画】

打田昇三の将門記 「罪と名声」(二・二)

弓袋山（ゆぶくろやま）の逆襲

現在は「弓袋」の地名が「湯袋」に変わっていて石岡地区と真壁地区の二か所に在るので、どちらか確定は出来ないのだが山深い場所のようなので真壁地区の湯袋だと思われる。

原文には「然れども将門は、なお伯父と宿世の讎（かたき）として、彼此相揖（ゆう）す」と書かれているが、相手が伯父でも何度も酷い目にあわされているので将門は簡単に許せない。反撃の機会を狙って居たのであろう。その伯父・義兼が常陸国へやって来た。場所は筑波山麓である。其処に義兼の領地が在ったらしい。

其の情報を得た将門は、積もり積もった恨みを一気に晴らそうと千八百余の軍勢を集めた。それは正に草木も靡くような勢いであった。九月十九日には良兼の居る真壁郡服織の宿（真壁町羽鳥）を襲撃したのである。原文によると服織宿を始め良兼の領地と思われる周辺の集落が悉く焼き払われたことになっている。

不思議でならないのは、将門の妻子にまで危害を加えた良兼が、なぜ上総国からノコノコやって来て警戒をして居なかったのか？である。原文には書いて無いが、良兼は前章段で将門軍を壊滅させた：将門が生きていても攻めては来られない：と思ひ込んでいたのかも知れない。

将門軍に急襲され危機一髪で難を逃れた良兼は集落の背後に広がる山林に逃げ込んだ。見た感じで

は隠れる場所も無いように思える筑波山麓一帯であるが現在でも広がる森林は予想以上に深い。将門軍は搜索隊を出して良兼らを追跡探策したのだが行方が分からない。周辺を捜している中に九月二十三日になって、敵は筑波山の東北部に広がる谷間に潜んでいる：という情報が齎された。

その近くまで兵を進めて見たのだが、一千余とされる軍勢の騒音は聞こえても敵を発見して攻撃する事が出来ない。将門は敵を取り囲むように布陣してから挑戦状を敵陣に射込んだりした。時は旧暦九月の末（現在の十月末）であるから日が暮れると山中の気温は急激に低下する。人間は野獣と違って寒さと餌不足には弱い。山麓と山中とに布陣した両軍は合戦を忘れて、冷え込む山中で夜を明かす為の対策を講じなければならない。

合戦というのは苦勞が多いもので、昼は相手を傷付け合い、夜は弓を枕に仮寝を強いられ、敵の動向に脅え、風雨には蓑笠を家として草を枕に仮寝するが、山中の蚊や虻までが敵になる。その様な苦しみを伴うが、双方共に敵に対する恨みが深いので暑さ寒さを顧みずに合戦をするのである。

：唐突ではあるが、此処で原本に欠落があるのかどうか、話が妙な方向に向かう：山中に潜んだ良兼の軍と是を攻める将門軍とが、どうなったのか記録が無いのであるが、原文に従う他は無い。

幸いにして：と言う言葉が適切とは思われないが平将門にとって、今回の戦さは時期的に恵まれていたように丁度、農民たちの秋の収穫時であった為に軍事行動を強引に行うことが出来た。例えば兵を進める際に、農民が収穫中の稲を深田に敷いて渡したり、其の辺りに干してあった稲束を軍馬や従軍中の牛に与えたりした。さらに兵士が農民の家から酒を奪つ

てくるなど乱暴なことをした。

そうなると大義も名分も無い凶悪な賊に過ぎ無くなる。将門軍の兵士で酒に酔って敵に討たれた者が七人も居り、餌を食べ過ぎて死んだ牛が十頭も居た。兵士はどうでも牛には気の毒な話である。

将門に従っていた平貞樹の陣の者では死者が居らず負傷者が出た。残念なことながら合戦の場となった多くの家が焼かれたのである。思っても悲しいことであるが、農民たちが丹精込めて作った稲も、収穫を前にして台無しにされてしまった。然もそれ程の犠牲を払いながら、将門軍は隠れた敵を見つけることが出来ず、虚しく本拠地に引き揚げて行くほかは無かったのである。

良兼の執念

筑波山麓近隣の住民たちに迷惑をかけながら何の成果も無く引き揚げた将門軍であったが、どういう風の吹き回しなのか十一月五日には中央政府から「上総介良兼、前常陸大掾源護、帰京していた平貞盛、それに良兼の子・公雅、公連など、将門の敵となった者たちを捕らえるよう」に命じた公文書が、武蔵・安房・上総・常陸・下野など関東一円の諸国に下されたのである。当然ながら将門は勇気百倍して意気は上がったのであるが、命令を受けた諸国の役人たちは困った。言うなれば常陸国などに土着した平家一族の内輪揉めに国が介入するように命じた公文書であるから、其れに従うべきか否か迷うのは当然である。

其の頃に「君子、危うきに近寄らず」と言う諺があったかどうか知らないが、役人たちは通達を無視

することにした。結果的に考えると近隣諸国の役人が命令に従っていれば平義兼らが討たれて（承平の乱は早期解決して）天慶の乱（平将門の反乱）は起き無かったことになるのではあるが：

自分が中央官庁から嫌われているとは知らない平義兼は、筑波山麓に隠れていてから将門が本拠に引き上げたのを見計らって領地に戻ってきた。

其処でおとなしくしていれば良いのだが、負けた恨みが増幅して、何としても将門を討つ決意を固めていたのである。幸いにして、という表現は合わないが近隣諸国の役人たちは中央政府の通達を無視しているので義兼には有利である。

密偵子春丸

密偵とはスパイのことであろう。007ではないがスパイが出てくると話は面白くなってくる。

しかし時代が未だ「戦国」に入っていないので（合戦を職業とする武士団が形成されていないので）生死を賭した平将門と平良兼の争いも観客からは「真面目にやれ！」と罵声が飛ぶような中途半端なものになっている。そうかと言って仲直りをした訳では無いから、両者とも自分の領地に籠りながら相手の様子を窺っていたのだと思われる。

その頃、将門の許で走り使い（雑用）を務めていた丈部子春丸（はせつかべのこはるまる）という者が居た。単なる使用人にも思えるが学者の説では古代から「駆仕・駆使・丈部」はせつかい

という名門の役職が有ったらしい。其れ程で無くても大事な用事を託されるのであるから信頼された人物でなければならぬのだが：其の子春丸には商売

の取引相手か、或いは恋人か、親類縁者か何れにしても頻繁に通う相手が居り、その場所が平国香館の在った石田庄なのである。石田庄は平貞盛領地になっていたから将門には敵地になるのであるが、子春丸は其れを知らずながら図々しく通っていたのである。

筑波山麓で寒い目に遭わされた平義兼は自分の勢力が及ぶ範囲に子春丸が通って来る事を知り、天の助けであると勝手に思い込んだ。自分の主人の敵地である場所にこのこと通って来るような軽率な人物は利用できると見たのである。そこで「讒言（ざんげん）の刃（やいば）」は岩石を断ち切ることが出来て、懇（ねんごろ）な頼みごとは山さえ傾けると言う。是は子春丸を使つて憎い将門を殺害しよう：と決めて子春丸を呼び寄せたところ通常ならば自分の主人が戦っている相手から呼ばれば逃げるか、疑うかする筈なのだが、子春丸は小春日和に散歩する程度の軽い気持ちで呼ばれる俥にやつて来たのである。

義兼は其れを捕らえ、子春丸の顔色を見ながら将門陣営の様子を聞き出そうとした。すると子春丸は何の躊躇（ためらい）も無く「それは結構なことです」と言い、「：それでは、此方の農民を一人、貸して下さい。私はその者を連れて戻り、少しずつでも情報をお知らせするように致します：」と答えた。敵側に忠義な立派な態度である。

当然ながら義兼は喜んで褒美に地元産の絹の布二反を与えた。是は絹でも品質の悪い物である。

義兼は言葉を続けて「お前の働きに依つて私が将門を倒すことが出来たならば、今の身分（下働きの苦しさ）から引き揚げて馬に乗れる身分にしてあげよう。そればかりでは無い、褒美として米俵や衣服も

与えよう。」と言った。

それを聞いた子春丸は義兼の言葉に籠絡されて中国の諺にある“駿馬の肉を食って其れが命取りになる”ことに気付かず（古代には馬肉を食べると死ぬ！という迷信があった）鳩毒（ちんどく＝鳩と言う鳥の羽から造る猛毒）の甘さに惑わされて身を滅ぼすように喜ぶばかりであった。やがて

義兼が付けた農民を連れた子春丸は推定であるが「良兼の襲撃」の項に登場した「栗栖院常羽御厨」の近くに在った自分の家に戻って来たのである。

その翌日、未だ夜も明けたばかりに子春丸は義兼から付けられたスパイの男を連れ炭俵を担いで将門の陣営を訪れた。普段から出入りしている商人が見知らぬ男を連れて来ても「炭をお届けに来ました」と言えば誰も疑わない。其の日は泊って

炭を切ったり物置を片付けたりしながら007のように将門館の見取り図と出入口や兵力の配置状況などを詳しく調べ挙げた。メモを取ると怪しまれるので、それを頭に叩き込んで二人のスパイは帰って行った。言うまでもなく、其の情報は平義兼の許に漏らさず報告されたのである。

石井（いわい）夜討

そこそこの身分が有る義兼の行為は武士道からすれば卑怯であるが、未だ「武士」階層が出来上がって居らず、そのモラルも行動も夜盗並みであったような気がする。平将門が新たに築いた石井（現在の岩井）営所の情報を手に入れた平義兼は喜んだ。寒い筑波山麓に潜んでいた甲斐があったと言う事になる。早速に兵力を揃えて石井館に夜襲攻撃を掛ける

べく、後の時代の「忠臣蔵・四十七士」を真似た訳では無いが、承平七年十二月十四日の夜に軍勢を差し向けたのである。

其の兵力は八十余騎だが俗に言う「一騎当千」の者が選ばれた。原本に依っては「八千余騎」となっているらしいが、奇襲攻撃であるから八千は多過ぎる。八十が正しい。選ばれた攻撃軍は漢の書物に記された強弓の名手・養由の様に弓を張り（養由は飛ぶ鳥を百発百中で射落としたという）更に伝説の名人・解鳥が造った（其れに近い自慢の品である）矢筒を負い、駿馬の蹄の音を轟かせて将門の本陣襲撃に向かったのである。

原本には「亥の刻（午後十時）に結城郡法城寺付近の街道に出て…」とあるが、是は結城寺付近と考えられている。古い寺院で現在は結城市内に在るが、当時は鬼怒川大橋の西北方に置かれていたようで、攻撃軍は其処から一気に南下して将門本陣を突く計画であった。

将門の陣営では未だ其の危機を知らなかったのだが偶然に将門の武将の一人が法城寺に居て敵の奇襲を覚った。最初は暗闇を利用して攻撃軍に入り込み暫く南下してから石井が近くなった辺り、多分、現在の八千代高校近辺と思われる地点から一気に駆け抜けて石井館に急を知らせた。ところが将門陣営は無防備状態であったから、居合わせた男女が驚き騒ぐばかりである。しかし、其の様な事情でも攻めて来た敵は遠慮なく、夜が明ける頃には将門の営所が完全に包囲されてしまった。

攻め寄せた敵に「…実は、此方には兵士が居ないので…」と言う訳にもいかないので、将門は十人足らずの兵に大声で緊急事態を知らせ「昔、聞いた話では（中国の話）由弓と言う將軍は自分の爪を楯と

して戦い数万の敵を打ち破ったと言われる。また子柱と言う勇士は針を武器として戦い、千組の鋒を敵から奪ったとされる。俺には古代の英雄に負けない勇気があるから安心して戦え。決して敵に後を見せてはならぬ！」と言い聞かせてから、目を見開き、歯を噛んで敵陣に突入した。

其の様子が如何にも恐ろしいのであったから館を取り囲んでいた敵兵は慌てた。将門に向かった者が倒されるのを目撃して、賢明な者は楯を放棄し蜘蛛の子が散るように逃げ出した。馬上の将門は是を疾風のような速さで追撃したのである。

合戦の勢いというのは不思議なもので、兵力には関係無く、逃れようとする者は猫に遭遇した鼠が巢穴の入口を失ったように惨めであり、是を追う者は例えば雉などを狙う鷹が鷹匠の腕から離れて飛び立つ様な勢いである。

兵力が極めて少なかった将門方は果敢に戦ったので、第一の矢で敵（義兼軍）の指揮官級武士である名族の多治良利を討ち取ったほか、四十余名の敵を倒し、押し寄せた軍勢を撃退することが出来たのである。義兼以下は辛うじて逃げ帰った。敵に協力した子春丸は、事情が明らかになって承平八年の正月早々に将門方に捕らえられ、直ぐに処刑されたので此の事件は終わった。

貞盛追撃

此の俚の題名では貞盛が追うのか追われるのかはつきりしないが、内容はトラブルを避けて都に戻ろうとする貞盛を将門が追うのである。原本は貞盛に好意的な表現をしているが、子春丸が将門方

に捕らえられたのが国香から相続した貞盛の領地内であることから、今回の襲撃事件に貞盛が深く関わっていた：とみる説が多い。それやこれやで現地に居難くなった貞盛は（此の時に常陸国府の大掾職に任官していたらしいが）やはり立身出世は都に限る：と考えるようになった。

原文には「身を立て徳を修（おさ）めるには朝廷に仕えて忠勤を励むしかない：」と立派なことが書いてあるが「此の田舎に居ても出世は出来ない！」と感じたのが正直な気持ちであつたろう。

人間の一生は長く無い。ならば正しく生きなければ、自分の行動には合わない決意を固めた、と言うよりも、伯父さんの喧嘩に巻き込まれて無駄な合戦をしている暇は無い：と気が付いたので取り急ぎ（こつそりと）花の都に戻ることにしたのである。けれども義兼が将門を襲撃した直後であるから、そう簡単に逃げられる道理が無い。

承平八年二月中旬（此の年、西暦九三八年は五月二十二日から天慶元年になる）平貞盛は伯父の義兼には内緒で（勿論、将門の目を逃れ）常陸国を脱出し東海道を避けて東山道經由で都に上ろうとした。一旦、栃木県に出てから群馬、長野、岐阜、滋賀と行く予定であつた。是は山道である。

密かに計画した貞盛の行動は身内の者には分らなかったけれども、敵である将門の許には素早く正確な情報が行き渡っていた。報告を受けた将門は「他人を讒言する者は、忠節な者が自分の上に居ることを最も嫌う。また邪悪な心の者は他人を妬む心が強い。是が、蘭の花が茂るのを秋風が遮る：と言う諺で表現される。あの貞盛が都へ行きたいのは、官職に就いて此の将門を悪人として追討したい気持ちからであるから、どの様な事をしてでも阻止しなければなら

ない！」と決意し、直ちに百余騎の軍勢を率いて貞盛一行の後を追った。

原本によれば将門軍は信濃国分寺の近辺で追い付くことになる。貞盛がどのコースを辿ったか記録は無いが筑波山西麓からだとか古河、館林、伊勢崎、高崎から碓氷峠、小諸が最短になる。二月二十九日に信濃国分寺の近くで追いついたらしい。

現在だと上田市の東、支流が千曲川に注ぐ辺りと推定されている。両軍は千曲川を隔てて合戦を始めたが、川を挟んで戦っても戦果は上がらない。

それでも貞盛方の武将・他田真樹（おさだのまき）が射られて死に、将門軍の武将・文室好立（ぶんやのよししたつ）は矢傷を負った。

其のうちに貞盛は山中に隠れてしまった。原本に「呂布の鎧を免れ（りよぶのやじりをまぬがれ）」とあるのは古代中国の武将が戦場の危機を脱したことに例えている。遙々と追いかけてきた将門側からすれば追い詰めた敵を逃がしたことになる。将門は悔しさで自分の首の辺りを掻き毟っていたけれども、山中に逃げられては探しようがない。

目的を果たせない俚に常陸国へ戻って来た。

此の場合、貞盛は都に行つて「将門の行動」を「反逆」として訴えるのが目的であるから、是を阻止出来なかつた将門には致命的な痛手になる。

正に「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権（権力）に勝たず：」で、実際はどうでも朝廷に訴え出た者が有利になる。信濃の山中に逃れた平貞盛は辛うじて都に至り、将門を反逆者として告訴した。既に訴えられ恩赦に浴した経歴のある将門は、どう弁明しても不利になる。将門記も是以後は平将門の評価が変るのである。

続く

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

【編集後記】

2019年は、6月28日に会の主査であつた白井啓治さんが亡くなられ、その丁度半年後の12月28日には重鎮であつた菅原茂美さんを失う事となった。お二人の死は本会にとつて大きな痛手であり、2006年より続けてきた本会報誌の最大の難局に直面したといえるでしょう。しかし、亡くなられた両師の意思を引き継ぎ次の分岐点である会報十五周年となる180号発行を目指し、白井先生の残された「ふる里とは、恋の降る里であり物語の降る里」のこトバを大切に、残されたメンバーで頑張っていきたいと思います。（記 木村進）